

浄土

monthly
JŌDO

12

December 2007



表紙の言葉

え
桜井良夫

12月

総本山

知恩院

浄土宗総本山知恩院。山号は華頂山。寺号は大谷寺。法然上人が東山吉水、現在の知恩院勢至堂付近に営んだ草案をその起源とする。現在に残る大規模な伽藍が建立されたのは、江戸時代以降。将軍家から庶民まで広く信仰を集め、今も京都の人々は親しみを込めて「ちよいんさん」と呼ぶ。三門は国宝。同じく国宝である本堂へ向かう急勾配の石段の途中で西面して建つ。今回はそれを内側から描いてみた。

東京・四谷

西念寺

寺に歴史あり

人々に信仰あり

日本の

心の故郷を紀行する

寺院
紀行



専称山安養院西念寺本堂、昭和三十六年十一月に第二十七世西嶋義彦先代住職が再建した。その本堂の前で二十八世西嶋和彦現住職の晋山式が行われた。式後に撮影した記念写真、向かって左から和彦住職、義彦先代住職、晃健副住職





西念寺本堂に祀られる阿弥陀如来立像は鎌倉時代の古
仏。戦災で左右の菩薩像、本尊後ろの後背は焼失した
が、義彦前住職がこの本尊を焼失から守られた





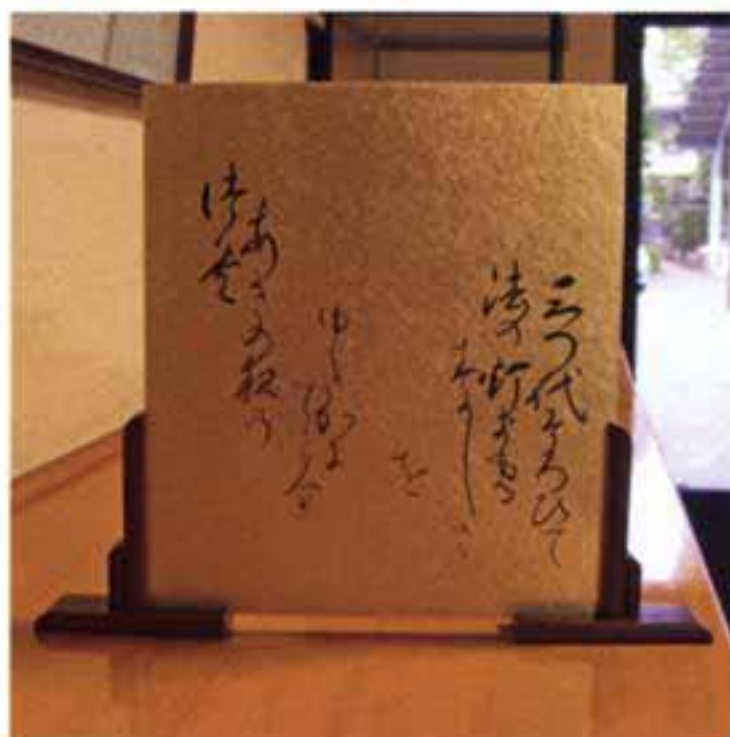
第二十七世から第二十八世への晋山式（法灯継承式）が平成十九年十月六日に行われた。国道20号線、新宿通り近くからのお練行列で、かつての甲州街道沿いにあった西念寺へ向かった。開門式、開扉式後、本堂に入堂、本尊前にて伝衣と過去帳が新住職に手渡された

西念寺第二十八世西嶋和彦住職。
浄土宗と関係の深い芝学園に長
く奉職されている





式後の祝宴で壇上にあがったのは親子四代。挨拶する西嶋和彦新命住職の奥に義彦先代住職、手前に晃健副住職、そして副住職の腕には法灯を継ぐことになるであろう副住職の長男慶真君がいる。法灯が代々継がれていくことに感動された檀家さんが一首詠まれ、その金色紙が西念寺に贈られた(右)



専称山安養院西念寺の寺名はかの服部半蔵の法名、専称院殿安養西念大禅定門からとられている。服部半蔵は忍者とされているが実際は忍者ではなく、槍の使い手。西念寺にはその槍(下)、そして半蔵のお墓がある(左上)



浄土

2007/12月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京・四谷 西念寺	写真=タカオ力邦彦	1
法然と親鸞(その三)	田島 栄	6
寺院紀行 東京・四谷 西念寺	真山 剛	16
会いたい人 加藤武さん③	関 容子	22
法然上人とその時代 壇の浦へ	石丸晶子	30
響流十方	林田康順	36
江戸を歩く 第十二回	森 清鑑	40
誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	51
編集後記.....		52



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会

公開講演会

法然と親鸞

脚本家

田島 栄

その三

舞台は比叡山の西塔黒谷の別所へと移ってゆきます。

法然上人は清涼寺の釈迦堂に参籠した後、奈良へ、醍醐へ、宇治へと、仏法の真理を求めてさまよいます。各地の高僧やすぐれた学者に会って教えを乞い、また仏教の書物を探し歩き、むさぼり読み、古今のあらゆる名僧の思想や宗門の教義を学びつくします。しかし、誰一人、現世にふさわしい生きた仏法を教えてくれる人はなく、心の支えになるような教義にめぐりあうこともできませんでした。人びとは法然の学問や知識が深くひろいことに驚いて、「知恵第一の法然房」とほめたたえますが、法然は学べば学ぶほど自分の愚かさを知り、悲しみが深まるばかりでした。失意のはてに黒谷にもどり、報恩蔵というお経の蔵にこもって、来る日も来る日も経巻を読みふけります。

故郷から訪れる人がありました。再会を喜ぶ法然……。しかしそれは母が死んだという報せでした。

「これが奥方様の書置でございます」

法然は遺書を受取って読みます。「……この文とどくときには母はこの世を去りて、時国殿のもとへ参りてあらんと思えれど、ゆめゆめ歎くことなかれ……。願わくばいまひとたびそなたとあいてさまざまなこと語りたく候えども、もはやかなうまじ、なにとぞいっそうの修行にはげみ、濁世じよくせの闇をさまよう人びとにみ仏の光りをもたらす僧になられるよう。母の願いはひとえにこの一事にて候……」

夕闇があたりを包み、母の声が聞こえてきます。法然上人は悲しみをこらえ、杉木立の闇をさまよいます。

「別れてから三十年、私は母上を思わぬ日はなかった。父の遺言と母が故郷くから見守っている……。そのことにはげまされ支えられて、修行に耐え道を求めてきたのだ……。母上

」。法然は地に伏して号泣します。だが、悲しみの中から立ち上がり、報恩蔵に入つて灯りを点し、善導大師の『観経疏』を一心に読み返します。

「行に二種あり、一つは正行、^{しょうぎょう}二つは雑行なり。正行と言うは専ら往生業の行^{ぎょう}によつて行ずる者、是を正行と名付く。何者か是なるや」――。

黒谷に朝が訪れます。霧がただよい、うぐいすの声がこだまします。水をくみに出てきた信空がふと見ると、報恩蔵の灯りはまだ消えず、徹夜で書を読む法然の声が聞えてきます。やがて扉が開いて法然上人が現われ、西方に向つて合掌し、高らかに念仏を称えました。思わずひれ伏す信空――。

「信空よ、善導大師は観経疏の中で、一心に阿弥陀仏の御名を称えることが、もつともみ仏の願いにかなう正しい行いであると説いている。弥陀の本願とは、阿弥陀仏が一切の衆生を救うためにたてられた四十八の願いのことである。その第十八願に、いかなる人間でも真心をこめて信心し、浄土へ生まれたいと願つて念仏を称えるならば、必ず浄土へ往けるであろう。もし一人でも往生できぬ者があれば私は仏にならぬと誓われたことである。この二つを併せ思えば、ただひたすらに念仏を称えるとき、み仏はわれらを導き給うこと疑いない」――。

承安五年（一一七五）の春、法然上人四十三才、浄土宗の立教開宗を告げる朝でした。

そのころの日本では、平家が権力を握り横暴の限りを尽していました。平重衡を大将とする平家の大軍が奈良に攻め入り、大仏さままで焼き尽くして、三千五百人も老若男女を殺してしまうという事件がありました。その少し前には源頼朝が伊豆で源氏再興をめざして兵を挙げています。御存じのように法然上人はその生涯の中で保元の乱、平治の乱、源平の合戦など多くの戦乱に出会ってきました。戦後の荒れ果てた世相の中で苦しむ民衆

の姿を見てきました。法然様の教えは深くこのことにかかわってつくられていったと思うのです。戦中・戦後を生きられたお方、このことが法然上人をととても私たちに身近に感じさせ、その教えが時機相應のものとして現代に生きてくるのだと思うのです。

時機相應という言葉は何回も使いますが、『法然と親鸞』という劇は、現代人の心に響く時機相應のものに思っています。

弥陀の本願にめぐり会った法然は、三十年の間住みなれた叡山を下りて西山の広谷に移り、ついで東山に吉水の庵室といわれる念仏の道場を今の知恩院の場所に開きました。上人の説く浄土の教えは大地にしみわたる水のように都の内外にひろがり、念仏は男女、僧俗、貴賤を問わず、多くの人びとの中に、生きる喜びの声となって称えられていきました。そのため、当時の高僧や学匠たちは、法然の人望と教えに興味や疑いや危機感を抱いて、法然を招いて法論を挑もうということになりました。

時は文治二年（一一八六）秋のこと、場所は大原の勝林院——。これが日本の宗教史上有名な「大原談議」で、まさに浄土宗の存亡をかけた問答が行われたのです。

談議の発起人は後の天台座主顕真という人で、参加したのはいずれも世に知られた名僧や大徳ばかりでした。ほかにも数百人の聴衆が庭にあふれていたと伝えられています。

舞台は大原の勝林院の場面になります。

本堂の阿弥陀如来のお像を前にして、法然と顕真が向きあって坐り、まわりには金襴の法衣に威儀をただした高僧や、有徳の聖^{ひじり}たちがきら星のごとく居並んで、荘厳な雰囲気がかもし出しています。

問答は朝にはじまり夜を徹し、暁を迎えようとしています。その間、いろいろな宗門の教義の理解について質疑応答が行われ、これからは、いよいよ法然上人の新しい教えにつ

いての論議に入ります。

鋭い質問が次つきにはなたれ、堂内に緊張がみなぎりますが、法然はおだやかに、だが確信に満ちた態度で明解に答弁していきます。

法然上人の論旨の中心はおよそ次の三つのことだと思います。第一は、煩惱にまみれた人間が希望を持って幸せに生きぬく道は何か？ それは弥陀の本願を信じて、ひたすらに南無阿弥陀仏と称えるほかにはない、ということです。

以下の論もみなそのことに帰結するのですが、第二には、八万四千もある仏教の法門の中からなぜ念仏だけを選んだのか？ その理由です。

み仏は人間の大きいなる父母です。だから子供である人間すべての幸せを願っているはずです。ところが今までの諸宗の教えは、内容がとても難しく、その上にきびしい掟を守り、善い行いや学問や修行を積みかさねなければならぬのです。だから賢く高潔な人物しか実行できず、きわめて少数の選ばれた人間しか極楽へは往けません。では、絶対多数を占める、欠点だらけの凡人はどうしたらよいのでしょうか？

法然上人は劇の中で説きます。「ありがたいことにみ仏は、われら凡夫の生きる支えとして、誰にでも歩める易しい道を開いて下された。それが易行他力の浄土門です。どんな悪人でも愚かな者でも、けがれ多き身といやしめられる女人でも、煩惱にまみれたまま、いつでもどこでも行える勤めは、阿弥陀仏が一切の衆生を一人も洩らさじと、平等の大慈悲から選びとられた本願の念仏だけです。ただひたすらに弥陀の本願を信じ、南無阿弥陀仏と口に称える念仏こそ、乱世に生きるわれらの救いの光りだと信じます」

第三には「時機相应」ということです。

「教えが時機にふさわしいものでこそ、教えは人の中に生き、人は教えによって生かされ

ます。教えを生かすには今がどんな時か、今の世に救いを求めているのはどのような人たちか、世と人のありさまをありのままにみつめ、はつきりと知らねばなりません。私は私という人間の姿を見つめ続けてきました。そして、みつめればみつめるほど、今の世に自力の修行で悟りを得ることなど思いもよらない私がわかってきたのです。弥陀の本願を頼みてただひたすらに念仏する、私には他に生きる道がありません」

問答はなお続きます。諸宗の教義を深く学び信奉してきた高僧たちには、法然上人の論理は余りにも型破りで新しすぎたのです。だが、理路整然と、しかも人間のありようの真実にふれる法然の話は、しだいに人びとの心をゆり動かしていきました。

やがて、顕真が立ち上り、阿弥陀如来の像の前に出て合掌します。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

その声に一人和し、二人和し、次つぎに唱和していきます。法然上人もいっしょに称えました。

暁の光が堂内にさしこみ、念仏を称える人びとを照らしていきます。念仏の声は集まったすべての人びとの間にひろがり、本堂の内外をゆるがすほど大きくなっていきます。

ここに法然上人の、一切の差別を排し、み仏の前にはあらゆる人間は皆平等であるという教えがはつきりと示され、日本仏教の改革が始められていきます。

次の場面は賀茂の河原です。

都の外れ、賀茂の神宮寺のそばに「賀茂の河原屋」とよばれた法然上人の庵室がありますが、その近くの場所を設定しました。

戦乱は終わったとはいえ、天災地変は度重なり、今日食べる物もなく、明日への希望を失った不幸な人びとが、都の辻や河原にあふれていました。難民が住む^{せじろ}蓆張りの掘建小屋が

散在し、枯れすすきに粉雪が舞い、空に群れ鳥が鳴き叫ぶ。鴨長明の『方丈記』に描かれているようなすさまじい状況です。

信徒の茂右エ門やお虎たちは、私財を投げうって難民に粥をふるまいますが、その米もたちまち底をつきます。

法然上人は難民たちに語りかけます。

「お聞きなさい。ここからはるか遠い西の方に極楽浄土という美しい国があり、阿弥陀仏というやさしい仏様がおいでなさる。阿弥陀仏は人間を深く愛され、私を信じ、私の名を呼ぶ者は、たとえどのような人間でもみな守り助けずにはおかないとお誓いなさっています。だから皆さん、阿弥陀様のお言葉を信じて『南無阿弥陀仏』と声に出して頼みなさい。たとえ大地を打つ手ははずれても、『南無阿弥陀仏』と称えて救われない人間は一人もありません」

雪が降りしきる中に、法然上人は人びとの手を取り、肩を抱きながら、「念仏を心の支えにして、せいっぱい生きぬこう」と説き続けるのでした。

美しい身なりの女性が従者に米俵を担がせて来ます。前関白九条兼実に仕える筑前という人です。

法然上人は、兼実公に感謝の意を伝えてくれるよう、筑前に頼みます。筑前は法然に、範宴という若い僧のひたむきな求道の精進と、叡山を下りて六角堂に参籠していることを語って、「ぜひお上人様の教えを賜りたい」と願います。

法然は答えます。「私は来るものを拒みはしませぬが、自力の修行を妨げようとも思いません。縁あらばきつとめぐり会えるはず」

次は六角堂の場面に移ります。

筑前と範宴(後の親鸞聖人)とは互いに恋し合う仲でした。しかし出家が女性を愛することは戒律にそむきますし、まして夫婦になることなど思いもありません。

範宴は六角堂の観音菩薩に祈り続けます。

「仏子範宴、幼き日より志を立て、聖教しょうきょうを学び修行にはげめども、今もって無明の闇を脱せず、煩惱に心乱れて、愛欲の広海をさまよっております。南無観世音菩薩……、願わくばわれにひとすじの光りを与え給え」

堂内には、僧俗数人の男女が疲れて眠っています。外には筑前が一人佇んでいます。

突然、「泥棒!」の声。飛びおきた人たちに、乞食のような身なりの若者が捕えられます。人びとは盗人を殴り蹴り倒します。

範宴はとめに入り、五郎太という名の盗人に身の上を聞きます。

五郎太は、「おれは三つのときに親に捨てられた。もし親が生きていたら二人とも殺す」と言い、悪態をついて逃げ去ります。

範宴は、再び観音菩薩に祈願します。

舞台は一度暗くなり、やがて暁の光がさしこみます。範宴がお堂から出て来ます。

「筑前殿、わたしの心が決まりました。行きます」「いずれへおいでになるのでございますか……。範宴様、いずれへ……。」「風が吹き、範宴の衣がはためく。「ああ、爽やかな風だ。野づらを吹きわたりくる朝の風よ……、私は行かねばならぬ、吉水へ……」

ここで第一幕の幕が降ります。

(つづく)

寺院紀行

東京・四谷

西念寺

撮影／タカ才力邦彦

文／真山剛



晋山式後の記念撮影。新住職を中心に奥様や家族親戚
そして法類（お寺の親戚）がそろっての一枚となった

東京は新宿区四谷にある西念寺、その西念寺で平成十九年十月六日、第二十八世西嶋和彦住職の晋山式が行われた。

晋山式とはいわば新しい住職のお披露目の式で、お練り行列、開門式、開扉式、そして新しい住職に前住職から衣や過去帳が受け渡されるといった厳粛な儀式である。西念寺の晋山式も三百人を超える檀信徒さんが見守る中、滞りなく式が済み、式後には会場を移し、祝宴も開かれた。

そのお祝い気分も抜けない中、新住職に無事に法灯を渡された西嶋義彦前住職に話を伺うことになった。

「いや、檀信徒のみなさんが本当に喜んでくださりましてね、いい式だったと。それに加え、祝宴の新住職の謝辞の時、一緒に私と副住職そして副住職の子供と、親子四代で壇上にあがったのがまた嬉しかったようです。とはいえ、檀信徒さん全員をお呼びできた訳ではないですから、後日、四枚組写真の簡単な刷り物を作ったのですが、これでも親子四代の写真が人気でしてね」

西嶋前住職は目を細め、満面の笑みでこう話された。この西嶋前住職、その顔を見れば、東日本のお坊さんなら知らない人はいない、という有名人だ。

浄土宗寺院は全国におよそ七千か寺だが、大きく分けると、西日本は京都東山の知恩院、東日本は東京芝の増上寺をそれぞれ総本山、



西念寺第二十七世西嶋義彦先代住職。五十年以上の長きにわたり西念寺の法灯を守られてきた。また浄土宗大本山増上寺にも永く務められてきた。

大本山として分けられているという、その増上寺で西嶋前住職は三十年近く勤められてきた、いわば増上寺の顔のお一人なのである。

「増上寺で仕えさせていただいた台下は六代、二度辞めたけど、二度呼び戻されましたからね（笑）」

台下とは大本山の住職にある方の特別な呼び名だが、その台下のそばで身の回りの世話をする内侍長が最後の役職だったそうだ。西念寺の住職歴が五十年、増上寺の勤務歴が三十年。昼間の時間で比べると、圧倒的に増上寺にいる時間が長かったに違いない。

続いて新住職の横顔を紹介しよう。

新住職といったものの先代が五十年以上住職をされていたこともあり、第二十八世西嶋和彦住職はすでに還暦を過ぎている。

昭和二十一年生まれのいわゆる団塊の世代だが、この団塊の世代、一般社会ではすでに定年族、リタイア組に入りだしている。だが、お寺の世界ではまだまだ通じる歳のようだ。

「私は長男でしたし、高校時代から棚経に回っていましたから、それほど抵抗なくお寺を継ぐことを決めました。そうですね、大正大学への入学が決意表明みたいなものでしたね。いまでも大学の仲間とは付き合いがありますが、みんなとつくに住職になっている（笑）。そういう意味では少々あせりましたかね」

がっちりした体格の新住職だが、大学卒業後、大手自動車販売会



山門を入ると左手に会館、そして客殿、本堂と続く。会館、客殿は平成四年十一月に新築された

社に入社し、大学の同期が自ら進んで買ってくれる人気車の営業販売に汗をかいだ。しかし、働きすぎで四年目に身体を壊して退社。その後は芝学園で事務の仕事に就いた。この芝学園はもともと浄土宗の宗門学校で、元をただせば増上寺の境内にできた僧侶養成所が前身になる。

「正確に言いますと、手続き上では去年の九月には住職として登録しています。ですが、来年の三月までは今の芝学園に勤めますので、住職としての実務上の仕事は来年四月からになりますね」

今の仕事はすでに三十三年の大ベテラン、先代であり父でもある前住職の増上寺勤務より長いわけで、増上寺とその裏の東京タワー脇にある芝学園に、西念寺の住職、副住職が三十年通っていたということになる。余談だが、新住職の娘さんと結婚し西嶋姓となった見健副住職もこの十月から増上寺に勤務している。こちらも祖父譲りか、すでに二度目の増上寺勤務になるという。どうも西嶋家と増上寺との縁はかなり深く、そして永そうである。

さて、今回の取材は前住職、新住職一緒にお話を伺ったのだが、前住職からの新住職へのアドバイスを聞くと、「しばらくは今まで通りのやり方をしなさい」とのことだった。

隣の新住職がにこやかにそれを聞いていたのが印象的だったが、米寿と還暦のこのお二人、とてもいい関係のようである。



会館は主に檀信徒さんの葬儀に利用され、檀信徒さんにとっては使いがったのよい施設になっている

「もう五十年以上も前ですが、仏跡を巡るツアーを都内のお寺の住職たちと始めましてね。白友会という会で天台宗のお寺が多いのですが、住職だけでなく家族も同伴するツアーです。それを三十年も続けるともう訪れていない仏跡が無くなってしまった。そこで、カナダへ行ったのが最初の仏跡以外のツアーでしたが、それ以来、特に行き先にこだわることなくツアーを組んでいるのですが、それももう二十年になりますかね」

義彦前住職はこの仏跡ツアーの発足メンバーの一人だけに、出来るだけ参加することになっているが、晋山式後の十月下旬に和彦新住職と二人で北イタリアツアーに行かれている。新住職曰く、「親父の足元がちょっと心配だったんでね」ということだが、米寿と還暦の親子二人が無事法灯を受け渡し、一緒に海外旅行とは微笑ましいというよりは羨ましい限りである。

しかし、二人がともに寺を空け三十年もとなるといったい、お寺の方が大丈夫なのか少々心配になる。

「芝学園は土曜日も授業ですから、手伝えて日曜だけでしたね。ただ、親父の方は勤め先がお寺ですから事情が分かってもらえ、土日以外や葬儀などの休みにも理解を示してくれますから、檀信徒のみなさんにはあまりご迷惑はかけなかったのではと思っていますが」

この連載を振り返ってみても、住職、副住職そろって勤めている



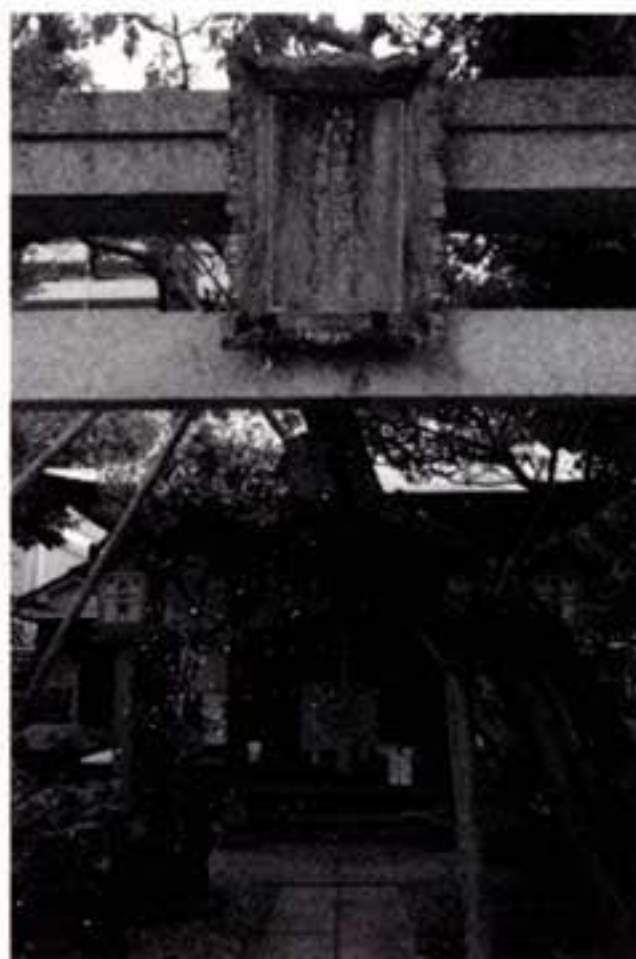
もともと西念寺は江戸城の城内にあった名刹で、創建当初は現在の清水谷公園と文藝春秋社の間あたりにあったという。写真は清水谷公園

というお寺も少なくない。それでもお寺に支障がないのは、お坊さんとその家族の努力もあるし、またそうした事情を汲み、理解を示してくれる檀信徒の協力があってこそなのだろう。前住職はこう語る。「今では神奈川や千葉など近郊に引っ越された檀信徒さんも少なくありませんが、昔は檀家さんは近所に住んでいて、散歩がてらにお参りに来る方も多かったですね。そんな時、よく話しました。余計なアドバイスはせずに、ただ聞く、不在がちでしたので余計に会話を大切にしましたね。それとうちのお寺はめったに寄附を募らないのも檀信徒さんには良いところかもしれませんね。今回の晋山式ももちろんお寺で負担しています」

しかし、普段は集めないからいざとなるとちゃんと集まるという。義彦前住職が続ける。

「第二十六世義豊住職が遷化したのが、昭和三十三年三月十八日でしたが、翌年に本堂の再建を企画しました。昭和二十三年に建てた仮本堂は二十五坪の日本家屋で、狭かったので何から何まで本堂で行っていましたよ。」

そこで、先代を支えてくれていた総代さんや世話人さんがお元氣なうちに新本堂を創建するのがいいだろうと、翌年から企画し、二年後に新本堂、今のこの本堂が落慶しました。この時はみなさんに気持ちよく寄附していただきました。



四谷怪談で有名なお岩さんの神社。須賀神社とならびこの辺りでは有名な神社だ

西念寺付近の道は細く入り組んでいる。これは伊賀者がこの地に住んでいた名残りで、迷路のような道はいまでもそのままだ



平成四年の会館、客殿新築の時も目標の一億円は無理と言われていたんですけどね、蓋を開けてみると予定を十分達成できてね、当初の計画より少し立派なものにさせてもらえました。本当にありがたいことです」

実は義彦前住職、増上寺時代に開山堂の勧募を経験し、六億円の目標に対して十二億円の寄附を集めている。その時に集め方の知恵を授けてくれたのが、北海道のある住職。その方、若かりし頃に西念寺の隣の寺に居たとのことで、その知恵を授けてくれたという。縁とは不思議なものである。

さて、服部半蔵の寺として有名な西念寺の歴史をひもとこう。

創建は文禄二（一五九三）年、今の平河町、清水谷公園の上に庵として建てられた。お寺の開基はかの有名な服部半蔵。半蔵は寺を建立中に五十五歳で逝去するが、無事完成を見る。そして、寛永十一（一六四三）年の江戸城大拡張工事にともない移転、移転先は伊賀者をまとめていた服部半蔵を偲んでか、迷路のように入り組んだ伊賀者の住んでいた現在地、四谷となった。

服部半蔵は戦国時代から江戸時代にかけて徳川家康に仕えた武士で、伊賀同心を支配し、徳川十六神将の一人に数えられたつわものである。

そしてこの半蔵がお寺を開くことになったきっかけが徳川家康の



本堂の脇間は千葉県大多喜城二の丸の間を移築したもので、床の間や欄間などが素晴らしい建築物だ

長男、信康の切腹事件である。織田信長は武勇にすぐれる信康を警戒し娘を嫁がせたものの、なお油断ならずとあらぬ理由から家康に信康の切腹を命じる。信長に逆らえない家康は泣く泣くわが子に切腹を申し付け、信頼する家臣、服部半蔵に介錯を頼む。しかし半蔵はどうしても介錯することができずに出家、庵居し信康の菩提を弔ったのである。出家した半蔵は名を西念と改め、信康供養のため専称念仏に励んだ。今の寺名、専称山安養院西念寺はこの半蔵の僧名からとられているのである。

こうした戦国時代の権力争いは時を越え語り継がれ、今でも西念寺本堂裏手にある半蔵の墓と信康の供養塔にはお参りが絶えない。

また、槍の使い手であった半蔵の愛用の槍も現存し、本堂脇間の床の間に寺宝として飾ってある。刃の先三十センチメートルは安政の地震で折れ、太平洋戦争の戦火で矢尻の百五十センチメートルを失い、柄の片面も焼け焦げたものの、それでも全長二百五十八センチメートルある槍は見事なもので、新宿区の指定文化財にもなっている。

この半蔵の由緒を残す西念寺、新住職を迎え新たな一歩を踏み出す、というより、この由緒や伝統をしっかりと守りながらこれからも今まで通りに多くの檀信徒と一緒に一歩ずつ確実に歴史を刻んでいくことだろう。

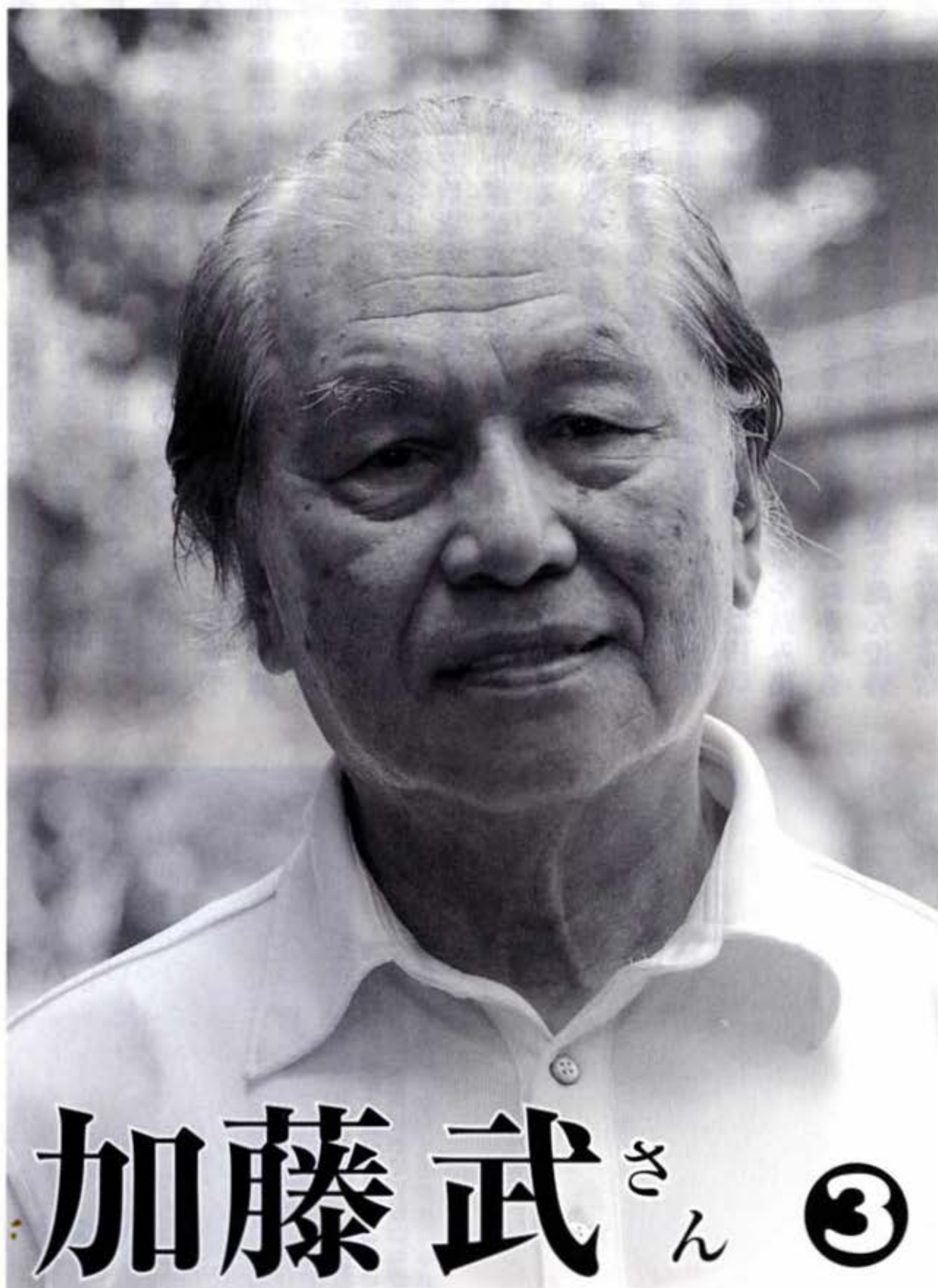
(ルポライター)



床の間には新命住職が寺に入る意の「入院の花」と呼ばれるいけばなが飾ってある

連載

会いたい人 関 容子



加藤武^{さん} ③

撮影／タカオカ邦彦

加藤さんが生涯の師と仰ぐのは、やっぱり杉村春子を置いてない。相手役として初めて大きな役がついたのは『トスカ』の警視總監スカルピア男爵だった。昭和三十八年のこと。「張り切って、扮装はナポレオンみたいな衣裳なのに、顔は白塗りで青黛^{せいたい}使ったりして、色悪^{いろあく}の民谷伊右衛門（『四谷怪談』）みたいにしちやって、最初ね（笑）。『なに、その顔は!?』って怒られました。稽古中にしたって杉村さんあきれることばかりで、イライラなさったでしょうね。昨日まで脇でウロウロしてたのが急に大役なんだから。このときは北村和夫は脇に回ってくれました」

北村和夫は入座していきなり『女の一生』（森本薫）の栄二役で認められ、この『トスカ』のころにはもう『欲望』という名の電車（テネシー・ウィリアムズ）のスタンレー役でも杉村春子のランチと堂々と渡り合っていた。

「あのころの文野明子さんもよかったね。プ

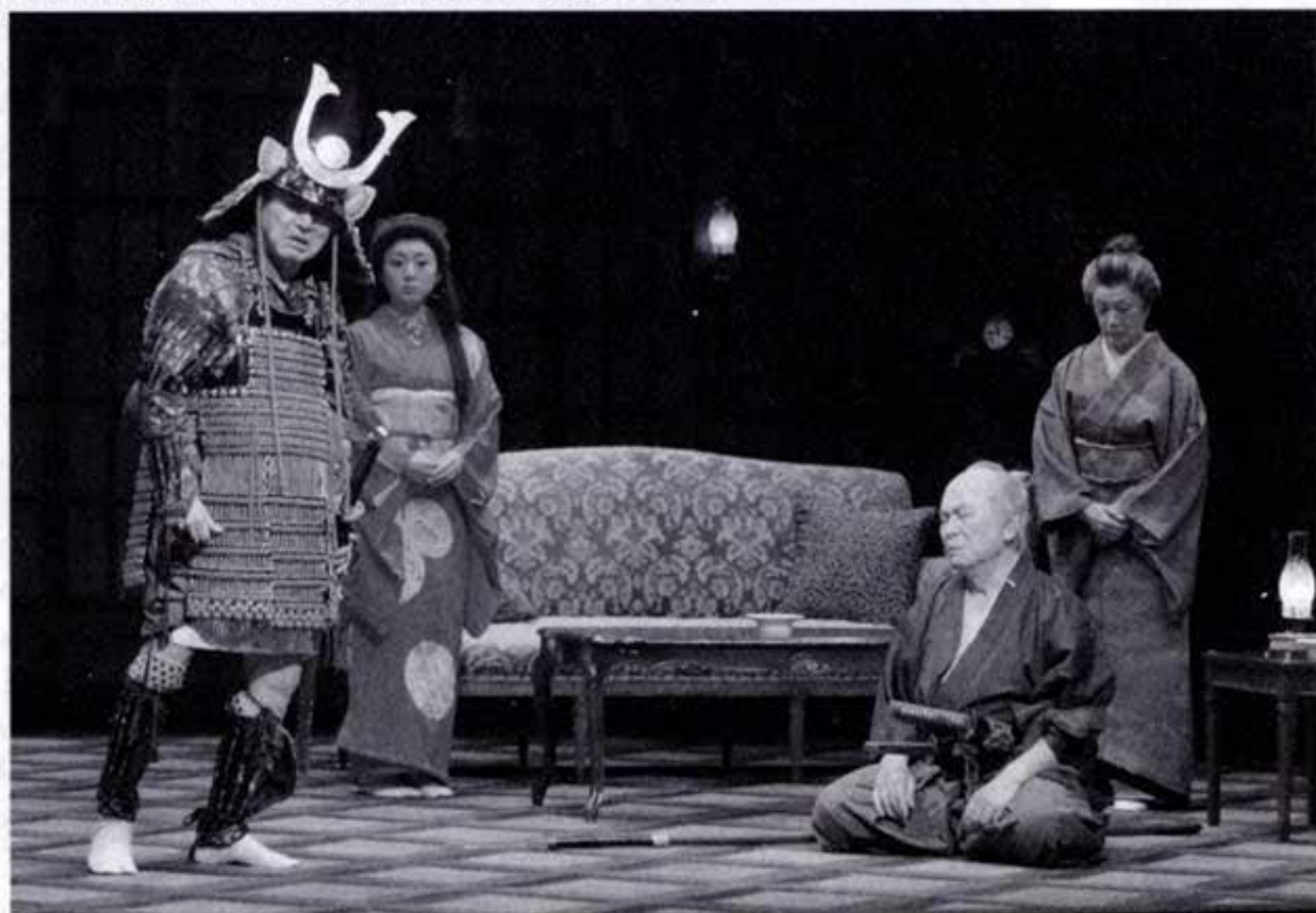
ランチの妹で、スタンレーのかみさんのステラの役で出てた。稽古のときでも、杉村さんがさんざん文野さんに怒って、厳しく仕込んだ。というのは、心の底では相当文野さんを買ってたんじゃない？ 『どん底』のときなんかも、ワシリーサを文野さんにやらせて、自分はまんじゅう売りのクブシニヤーなんてほんの脇役に回ってね。岸田国士先生はこれが初演出で、稽古中に倒れて亡くなったんだけど、配役一つにしてもそんなふうにする偉さがあつたね。もっと偉いのは、御自分の娘の今日子さんなんか、ただの通行人だったからね」

のちに文学座に第一回の分裂事件（昭和三十八年）が起つたとき、文野明子は夫の神山繁と行動を共にして脱退した。

「『欲望』のころ、神山も俺と一緒にまだ裏方やってたんだ。文野さんは傍目でもわかつたくらい杉村さんに可愛がられてたのに、分裂の時、涙を吞んで神山と一緒にやめてった。



「殿様と私」左より城全能成（「白河義知」役、殿様の息子）、たかお鷹（「白河義晃」役、殿様）、加藤武（「雛田源右衛門」役、白河家の家令）



「殿様と私」左よりたかお鷹、松山愛佳（「白河雪絵」役、殿様の娘）、加藤武、寺田路恵（「雛田カネ」役、加藤の女房役）

つらかったろうと思うよ。北村はこのとき、のちに夫婦別れに至るんだけど、最初の奥さん（佐野タダ枝）が出て行ったのに、自分は文学座に残った。もちろん俺も残ったんだけど」

それからというもの、ますます杉村春子一辺倒になる。

「せりふの言い方から役者根性から、総て杉村さんから教わりました。あたしもずいぶん怒られましたよ。『鹿鳴館』の飛田天骨という殺し屋の役は宮口精二さんが初演でなさった役なんだけど、旅公演のときにぼくに回ってきた。待ってましたとばかりに、殺し屋なら凄味のある、歌舞伎で言や五段目（『忠臣蔵』の定九郎、とかのイメージが頭にあるから妙に時代っぽくやっちゃう。それをあるとき杉村さんにズバッと指摘されたね。あなたの芝居は全部借り物よ、って言われた。最高にシヨックだった。忘れもしない、昼休みにザルそばを食べていた時にそう云われてそ

ばが喉につかえちゃった。子供のころからいんな芝居を観ていたから、この役なら歌舞伎で云えばあの役だと情景が浮んできて、器用に真似るでしょう。それがいけないんだね。そんな事はいつぺん忘れて、自分なりにこなして再生する、というのがなかった。このことは深く肝に銘じましたね」

加藤さんが文学座の後輩の中で、一番可愛く思い、最も期待していたのは太地喜和子。

「うん、あんな可愛い後輩、いなかったね。芝居がほんとに好きで、情熱的で。普段はアツケラカンとして、ケラケラ大口あけて笑うし、面長の顔にポツンと黒い目が二つついて、まるで生まれたてのオットセイなんだ（笑）。それが舞台だとどうしてあんなにゾクツとくるような色気が出るのか。あれは舞台でしか咲かない花だったんだ」

酒が強く、恋多き女としても盛名を馳せた女優として、没後かなりの年月を経た今でも

『遊女夕霧』左より太地喜和子（「遊女夕霧」役）、杉村春子（「円玉女房お峯」役）、加藤武（「悟道軒円玉」役）



多くの人たちに愛され続けている。

「そう、酒を飲まずんば喜和子を得ず、って言われるくらいのもので（笑）、いやあ、強いよ、あの子は。これ、人から聞いた話だけど、『座頭市』で共演した勝新太郎さんと一夜、痛飲したんだって。勝新さんは酒に飲まれないお人だから、喜和子を宿の前まで送り届けた。そしたら、ねえ、もつと飲みましょうよ、あたし何にもしないからさあ、って。これ、男の言うせりふだよ（笑）。でも、俺

もバカで、飲めもしないのに一度だけつきあったことがあった。死ぬ苦しみだったけどね。

酔つてくると、あいつはちよいと舌つたらずになつてきて、これが何とも色っぽい。しかし言うことはしつかりしてて、女は結婚して子供を生み育てる、これは一生をかけた大仕事である。一方、女優というのも一大事業で、神ならぬ身のどうしてこの二つを両立できるでありましょうか、つて言うんだ。どっかで聞いたせりふだな、と思つたらここまでは杉村大先生の御高説でした。でも喜和子は、でもね、つとくるんだよ。ときどきふつと、ああ、子供が生みたいなあ、と思うときがあるの、つて。キリツとしてたかと思うと、どつとくずれる瞬間、というのが実によかった。ほんと、可愛い風情だったねえ」

だから結婚して子供が生まれて、楽屋の杉村春子に子供を見せに来る女優がいたりすると、太地喜和子は怒っていた。

「あまりにデリカシーがなさすぎる。女優な

んでそんないい加減なものじゃない。子供も作らずに励んでいるんだつて」

加藤さんが太地喜和子と共演した舞台と言えば『遊女夕霧』（川口松太郎）を観たことがあった。太地喜和子の役は、吉原の積み夜具の費用を作るために詐欺まがいなことをした男を助けようと、必死で助命嘆願の署名を頼んで回る新潟出身の遊女。加藤さんは頑固一徹な講釈師、静かに同情を寄せるその女房が杉村春子。新派だと花柳章太郎、大矢市次郎、英太郎（先代）が極め付きだったが、文学座のもこれとはひと味違う、しみじみとした名舞台だった。

「夕霧。喜和子にびったりだった。ああいう芝居をよくまた自分で見つけて来たしね。男のために一日中駆けずり回つて、悟道軒円玉つて講釈師の二階へ上つて来たときは、花柳さんはもう着付けがグズグズになつてるんだ。前をはだけちやつてね。このグズグズの着方ができない、つて喜和子は口惜しがりや

がつてね。あれは花柳さんの女方独特の芸なんだよって云ってやった。女優だといくら崩そうとしても、つい杵元とかを合わしちゃうからね。でも、喜和子の夕霧よかったよ。あのひたむきさ、可愛らしさがね。杉村さんがそつと湯呑みに酒を持ってきてやるとこなんかも、ほんとによかった」

加藤さんとはよほどの因縁があるのだろう。太地喜和子最後の舞台となる『唐人お吉』（山本有三）の旅公演のときも一緒だった。

「俺がハリスですつと一緒。明日はいよいよお吉さん由縁の下田でこの公演も終り、という前の晩、伊東でとんでもない事故があった。俺が宿で寝てたら、突然、知らない人から知らせの電話があった。知らせてくれた女の方は眠れなくて夜の浜辺でカセット聞いてたら、車が海に飛び込むのを見たんだね。救急隊にも通報してくれたんだけど、同乗者は自力で脱出して、結局喜和子一人が亡くなっちゃった。もう口惜しいなんてもんじゃなかった

たね。通夜は文学座の二階の狭い座敷でやったんだけど、お棺の前に唐人お吉が新内を弾き語りする小道具の三味線が置いてあった。弔問に来た勝新さんが、その小道具のボンボコ三味線を手に取って、弾いたけど、これがうまいもんだったね。またこっちの狭い階段のところには、八十助だった三津五郎さんが、いつまでも座りこんでて動かなかった。歌舞伎の人から声がかかると喜和子は喜んで共演した。そしてみんな相手役が魅了されちゃうんだよね。あんな女優はもう滅多に出ない。まだこれからっていう四十八で亡くなるとは、ねえ」

加藤さんは今もときどき可愛い後輩の墓参をしている。

「命日なんて関係なく、ふと思い立ったら行ってやってんだよ。巢鴨のお地藏様の近くに墓があつてね」

このところ加藤さんは、早稲田大学時代か

らの親友である今村昌平監督、北村和夫と死別し、麻布中学で同級だった仲谷昇も失った。

「寂しいけれど仕方がない。わたしやあ落語の『寝床』の番頭じゃないけど、因果と丈夫でね。相変らず声はでかいし、枯淡の境地とは程遠い。回りからいたわられるようになってちやあおしまいだと思うから、年齢にさからって、老け込まないように努力してますよ。」

「ピリーズ・ブート・キャンプ」ってDVDあるの知ってる？ ハードなプログラムなんだけど……あれを汗びっしりになつてヒーヒー言いながら続けてますよ」

加藤さんの最近の舞台は『殿様と私』（マキノノゾミ）の子爵家の家令役。明治になつて時代の変化について行けない一徹な老人を熱演。熱く演じれば演じるほど、おかしくて、それが哀れに見える皮肉な役。そこをうまく表現した。

「ぼくも中学のころに日本が敗けて価値観が百八十度ひっくり返っちまった体験がありま

すからね。この老人の気持はよくわかるんですよ。脚本が実によくできているしね。とにかく私は過去のこととはこだわらずに、生きる限りは前へ前へと気が行っちゃうの。これから自分に合ったなるべく日本の芝居で、身丈に合った役に恵まれて、末長く役者を続けたいと思ってますよ」

みごとな闊舌、頼もしい足腰の動き、活力溢れる文学座の加藤武を、ずっと客席から観続けていたい。

（この項おわり）

法然上人
とその
時代

シリーズ第四章

壇ノ浦へ

第三回

作

石丸晶子

画
アーサ



七

通盛戦死の報を時員がもたらしてから二日
が経った。以来小宰相は思いつめた様子で乳
母にも口をきかず、船中、女房たちの寝所に
当てられている板の間に伏せったまま、沈み
こんで悲しんでいた。

そんな状態の中、二月十四日の夜も更けて
いった。

波の音、船を漕ぐ櫂の音が低く聞こえるだ
けで、船内の人々の多くも寝静まっているら
しかった。

と、突然、小宰相は枕から身を起こすと、
隣に伏せっている乳母に声をかけた。

「あわれ、今思えば、明日は一の谷で源氏の
武者たちとの合戦になる、という夜、殿が平
家の陣地にわたくしをお呼びになったのも、
虫の知らせであつたのか」

乳母も身を起こすと、

「まことにそうでありましたろう。あの時は
陣屋に奥方様をお呼びとはと、御弟教経様の

お怒りもありましたなれど、今思えば、み仏
のお導きがあつてのことであつたと思われて
なりませぬ」

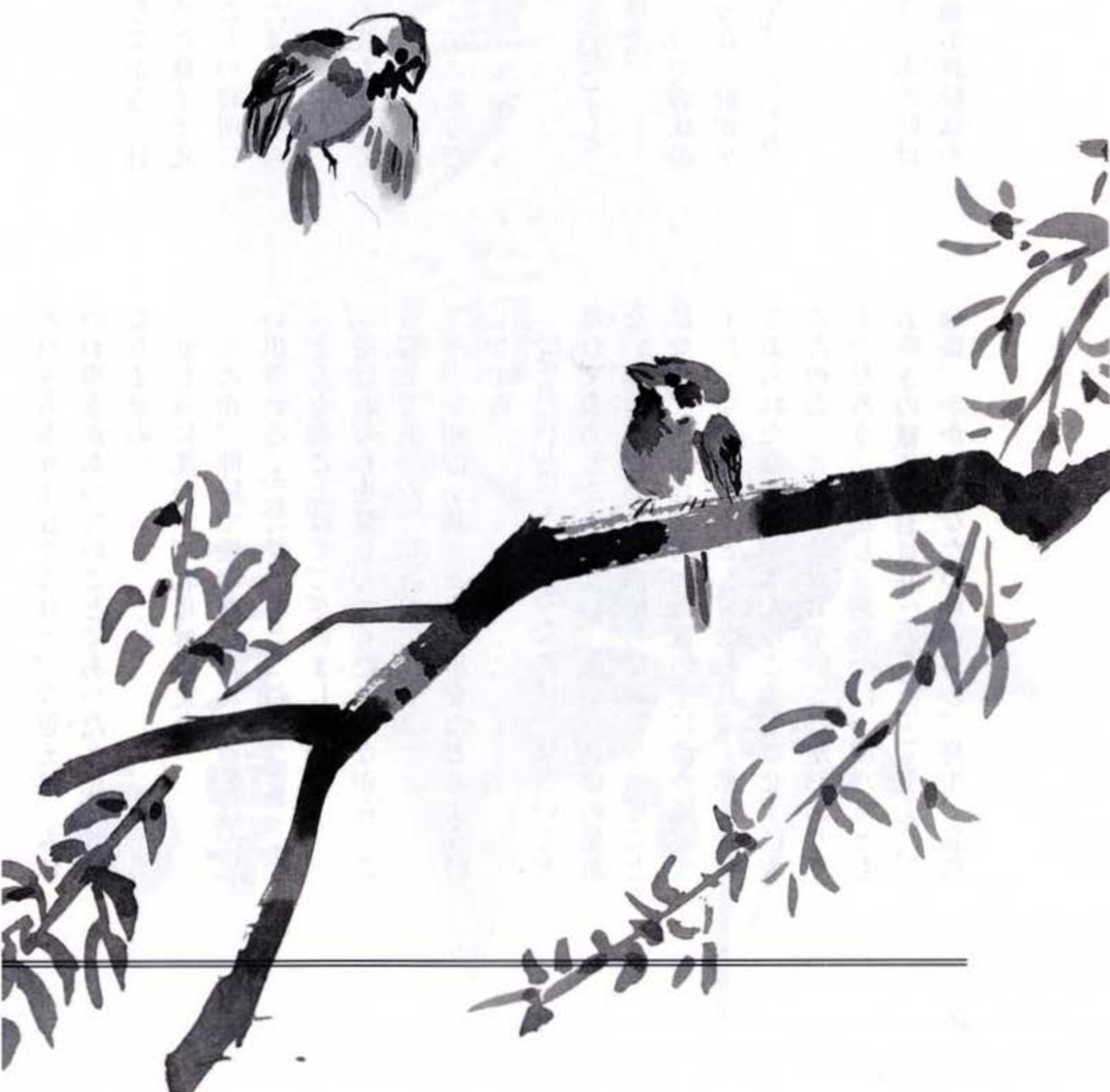
悲しみに沈む声で乳母は応えた。

「あの夜、陣屋で殿が仰せられたことばが思
い出される。あれはまことに遺言であつた」
「どんな御ことばでございました」

「殿はわらわを愛しんでくださりながら、こ
う仰せであつた。『それにしても』」

と小宰相は一語々々思い出をたどるよう
にしながら、

「『それにしても、あなたとは一日といえど
離れて暮らしたくはない、という通盛の果敢
ない願いのために、都落ちに同行させること
になり、あなたは習わぬ旅の空に漂うて、す
でに二年になろうとしておられる。都に残つ
ておられたならば、こんなご苦勞はせず
にすんだのだ。どんなにかお辛いことがあり
であつたろう。しかし、あなたは一度たりと
もお嘆きの様子をお見せになったことがない。
通盛、かかるあなたの尊いお心、終生、忘れ



はせぬ』

夫のことばをたぐり寄せつつ、いつしか小宰相は合掌していた。

乳母もおのずから手を組み合わせ、小宰相の次のことばを待った。

「『ただ心に懸かることは、われらは暇なく戦の庭に向かう身、わたしが討ち死にした後、あなたはどのようなようにして世をお過ごしになるのであらう。このことが気がかりでならない』」

八

「それはまことに殿様のご遺言ではございませんか」

乳母は小宰相に顔を向けて言った。

「その時はそうは思わなかったけれども」

と小宰相は、

「殿様のお優しいお心が、あわれにも身に沁みても思われてね、わたくしが殿のお子を身ごもったことをそれまで隠して申し上げなかったのだけれども、あまりに気強い妻だと思

われたくないと思って、

『殿、わたくしは今、身重のからだでござい
ます』

と申し上げたのですよ。すると殿様は驚かれ、
また非常にお喜びになってね、こう仰せられました」

しばし瞑目した後、ふたたび小宰相は続けて、

「『通盛、すでに三十になるが、今に至るまで子というものを持たなかった。何と嬉しいことであらう。この世にわが命を留める形見となろうぞ。ただ、いつ終わるともしれぬ波の上、船の中の住まいなれば、ご出産のこと
も案じられる』」

「―殿様はまこと御優しい方であらせられました。そう仰せられますお声が聞こえて参ります」

乳母は啜り上げた。

「でも、そう言い置かれたこともみな、今となつては空しい心配事になつてしまつたのよ。最後にお逢いした六日の逢瀬を永の別れ

と気づいていたなら、後の世でもまた夫婦になりますと、どうしてお誓いせずにいられなかったろう。今はどうにか忘れることができたととしても、生まれてくる子供の顔を見るたびに、亡き夫のこのみが思い出されて、悲しみの深さは増しこそすれ、慰められることはないわ」

小宰相は掻き口説いた。悲しみに高ぶった気持ちで、彼女を一種雄弁にしていた。

「殿は時員に、

『奥方の行く末をお見守り、お世話申し上げよ』

とご遺言されたと言うけれど、このまま生き永らえたならば、どんな思いがけないことに会おうかもしれないのよ。そんなことになるとしたら、殿も草葉の陰で見えてお辛いでしょう。今は、殿にめぐり合った初夜の契りさえ恨めしい気持ち。だから、

『このまま生きていて絶えず物思いに沈んでいるよりは、いっそ火の中でも水の底にでも入ってしまったおう』

とわたしは思っているの」

「まあ、何を仰せられます」

思わず、顔に当ててていた袖を払いのけ、驚いて乳母は言った。

「お心を強うお持ちなされませ」

それには構わず小宰相は、

「さてもさても、それにつけてもそなた、ようもかかる所にまでわたしに付いて来てくれました。そなたの心、小宰相、忝くお礼申します。殿の戦死を知って、この二日の間に都にいる兄達には手紙を書いておきました。わたしが死んだ後の仏事のことが書いてあります。そなた、都へ届けてくださいね」

九

「奥方様、ほんとうに如何遊ばされました。この乳母には分らないことばかり仰せです」

小宰相は日頃、口数の少ない女であった。その彼女が、自分の死後の仏事のことまで滔々と一気に言つてのける。

奥方はほんとうに千尋ちひろの海底かいていにまで沈んでしまふご覚悟なのではあるまいか。乳母はおどろきあきれて、涙ながらに、

「今度討ち死にされた方々の奥方さま方は、どなたのご悲嘆も一通りのものではございません。決して御身一人だけのことではないのです。お子をお生みなされてお育てなさいませ。亡き殿様の御形見としてお子のご成長をお見守りなさらねばなりません。それでもご得心のゆかぬ時には、その時こそご出家され、亡き殿のご冥福をお祈りになればよいでしょう。来世には必ず同じ蓮の上に生まれ変わろうとお思いになつても、六道四種、どの世界に生まれ変わるかしれません。今、奥方様が海底に沈まれたとしても、殿にまみえることが出来るかどうか、難しうございます」

「思い余つて言つてみただけよ」

搔き口説く乳母をみて小宰相は、

「どんなに悲しく思つたとしても、ほんとうに水の底に沈もうなんて思うのですか。ちよつと言つてみただけ。さあ、今夜ももう更

けたわ。早く寝やすみましょう」

そういつて、袖から懷紙をとりだして涙を拭うと、小宰相はそのまま横になつた。

何かふつ切れたような表情で小宰相がいうのを聞いて、安心した乳母もそこに横になつた。狭い船の中で波に揺られ、平家方敗北の混乱と興奮がつづくこの日々、しかも今夜は、入水じゅうすい云々という乳母子めのとこのことばさえ聞いて疲れきつた乳母は、横になるや思わず寝入つてしまつた。

漫々たる海上を月光が隈なく照らしてゐた。船中の人々は昼の疲れに寝静まり、起きているのは梶取り一人。

船は月光のなかをゆつくりと瀬戸内海を屋島目ざして西へ進んでゐた。梶取りが櫂かいを漕ぐ音、ときどき船べりに波がかかる音がする以外、静寂の気配が漂つてゐた。

とそのとき、すつくと身を起こして、一人の女が船端に歩みよつてゐた。

小宰相である。

(つづく)

人のいのち終らんとする時、阿弥陀ほとけ聖衆とともに、目のまえに來たり給いたらんを、まづ見まいらせてのちに、心は顛倒せずして、極樂に生まるべしとこそ心得て候え。（中略）いま一返も、病なき時念仏を申して、臨終には阿弥陀ほとけの來迎にあづかりて、三種の愛心を除き、正念になされまいらせて、極樂に生まれんとおぼしめすべく候。

（『往生淨土用心』）

人の命が尽きようとしている時、阿弥陀さまが諸々の菩薩と共にその人の目の前にお迎えに來て下さり、そのお姿をまず拝することによって、心うろたえることなく極樂に往生するのだと心得て下さい。（中略）健康な時に一遍でも多くのお念仏を称え、臨終には阿弥陀さまのお迎えを頂戴して、「三種の愛心」を払い除き、心静かな安らかな気持ちにしていただいて極樂に往生しようと思い定めて下さい。

阿弥陀さまが語りかけて下さるからこそ——正念來迎から來迎正念へ——

去る平成十九年九月二十六日、日本救急医学会は「救急医療における終末期医療に関する提言（ガイドライン）」を発表しました。もちろんこのガイドラインは、「使用するにあたって」の中で「通常の医療現場における慢性疾患を含む一般的な終末期医療について言及するものではない」と断り書きを施しているように、すべての医療現場にあてはまるものではありません。ただ、こうしたガイドラインを提言する動きの背景に、昨年三月、全国に大きな波紋を投げかけた富山県の射水（いみず）市民病院で起きた延命治療中止問題があることは言うまでもありません。「七人が死亡」と大々的に報道されたこの事件により、高度に技術化された現代医療の中で、人工呼吸器の取り外しをめぐる、患者やその家族と医師との関係構築の必要性があらためて問い直されることとなりました。すなわち、尊厳死を望み、延命治療の打ち切りを希望するリビングウィル（生前の意思）を患者本人が遺していなかった場合、その家族は、目の前に横たわっているかけがえのない大切な方ならば、その最期の時をいかに迎えるだろうかという想いを真摯に付度し、医師にその想いをしっかりと伝えられる関係が構築できていることが何よりも大切だからです。

ところで、法然上人ご在世当時、「三種の愛心」といって、臨終の際、人は

三種の執着の心を起こすといわれていました。それは、①家族など大切な方への愛着である境界愛、②自身の存在そのものに対する執着である自体愛、③死後どうなるのかと憂える当生愛です。口には出さずとも、こうした思いが現代人の心の奥底にも厳として存在することに疑いを挟む方はいないでしょう。そして、臨終にあたり、そうした「三種の愛心」を自身の力で克服して、まず心を静めて安らかな気持ちでお念仏を称えている時にこそ（正念）、阿弥陀さまはお迎え下さる（来迎）、と考えられていました。

阿弥陀さまの来迎とこうした人の心の有り様とをめぐって、阿弥陀さまの慈悲を汲み取られた法然上人は、冒頭のご法語をお遺しになり、「私たちが正念になるから阿弥陀さまの来迎がある」という考え方を、「阿弥陀さまの来迎があるから私たちが正念となるのだ」と一八〇度転換して下さったのです。阿弥陀さまは、死を目前にした私たち人間の心の弱さを手に取るようにご存じでした。だからこそ阿弥陀さまは、日頃、お念仏を称えている方のもとへ自ら来迎されて、「今、様々な悲しみや不安があなたを覆っている。しかし、心配には及ばない。私があなただを必ずわが浄土へと導こう。そして、わが浄土からご縁のある人々をしっかりと見守りつつ、悟りを目指して仏道に精進しなさい」

と優しく論されるのでしよう。こうしたお論しを阿弥陀さまから直接いただければ、「わが身体には長い間本当にお世話になったが、ここらでお別れさせていだだこう。阿弥陀さまが導き下さる以上、浄土往生は間違いない。この世での家族や大切な方々との別れはしばしの間であって、必ずやお浄土で再会させていだだこう」と、自ずと私たちの心は落ち着き静まることでしよう。

科学的な基準によれば、臨終を迎えている方の意識は多くの場合認められないうでしようし、ましてや、お浄土の存在など証明できようはずありません。しかし、そのことも私たちに知る術がないからなのでしよう。冒頭のご法語の直前、法然上人は「臨終というのはあたかも一本の髪をスツと切るほどの一瞬のことですから、それがいつであるかは周囲の人は知るよしもなく、ただ阿弥陀さまと臨終を迎えたその人だけが知り得るのです」とご指摘です。臨終を迎えた家族の人工呼吸器の取り外しをめぐり、いかなる結論を選ぶにせよ、それが目の前に横たわっているかけがえのない大切な方の想いを精一杯汲み取ろうとした末の結論であれば、今まさに息を引き取らんとする方はその想いを素直に受け取めて「これまで本当にありがとう。一足先にお浄土で待っているよ」と私たちに優しく声をかけて旅立たれることでしよう。

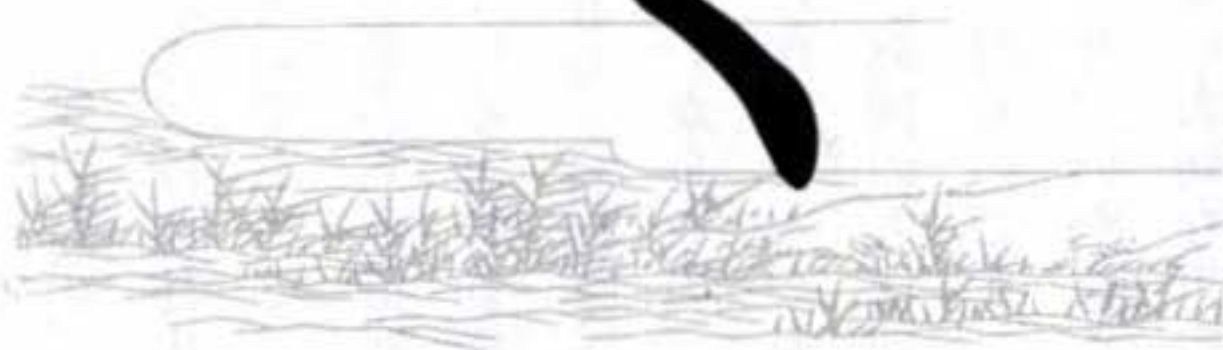
合掌（林田康順）

江戸を歩く

九品仏から目黒へ

第十二回

田園編



大江戸ウォーカー

森 清鑑

蛸薬師

店が立ち並ぶ目黒不動門前町の目抜き通り（現不動前商店街）を東へ少し行くと道に面して右側に成就院、蛸薬師がある。当寺も天安二年（八五八）、慈覚大師の開山。大師は唐九年の修学を終え、帰路海が荒れ、御持仏（薬師様）を海神に献じ、無事帰国できた。その後、諸国を巡り布教。ところが、肥前、松浦で、眼前の海に、突如、光明を見、中国からの帰路で、海神に捧げた薬師様のお像が蛸に乗って浮かぶ。時を経て、目黒の地に来たとき、その光景を霊木に刻み、諸病平癒を祈願した。蛸薬師の縁起である。

心願成就、開運、病氣平癒（イボ、タコとり）の祈願で広く江戸庶民の信仰を集める。境内には六体の阿弥陀如来像がある。お静地蔵。「お静の方」は二代將軍秀忠の側室で、その子は、後年の保科正之。彼が高遠城主に出世した折、大願成就のお礼にこの寺に収め

た地蔵である。家光にとっては、將軍後継争いで、弟、忠長ただながとの悲劇があった。しかし、彼は、異母兄弟にもかかわらず、保科正之を大切にした。同時に正之も終生、家光を支えた。したがって家光の信任最も厚く、正之は、会津藩松平家の始祖となり、また、家光の子、四代家綱の後見人を託されている。これを見事にやり遂げたのが保科正之である。

江戸時代の道はこの蛸薬師正面から左へ直角に曲がり、再び目黒不動に出る。すなわち、蛸薬師の門を出ると、真正面に不動の森が見えた。現在は、そこに五百羅漢寺がある。

五百羅漢寺

目黒不動尊前には川が流れていた。この川は、仁王門前を通り、不動尊の南東部分の境界を仕切るように下目黒町（山手通り）を抜け目黒川に注いでいた。現在は消滅しているが、林試の森北側をなめ（遊歩道）、仁王門前を東に続く散歩道になり、五百羅漢寺、海



◆蛸薬師、お静地蔵

福寺前の歩道がそれである。羅漢寺川と呼ばれていた（おそらく五百羅漢寺が深川から移転してきた以降についた名前）。すなわち両寺の在るところは、江戸期目黒不動尊の敷地であった（現在の山手通り近くまで）。

五百羅漢寺。江戸時代、「本所の羅漢さん」（黄檗宗）として知られ、庶民の信仰を集めた。亀戸村の小名木川と堅川に挟まれた田畑の中央にあった。北斎も広重も「五百羅漢さざる堂」を描いている。本堂の左側に三階建ての高楼があり、さざえ貝のような螺旋状の階段があつたので、人々は「さざる堂」と呼んだ。最上階にでると、その眺望はすばらしく、広重は北東の田んぼの先、堅川沿いの民家の景色を、北斎はその反対側の南西の富士を描いている（富嶽三十六景）。ここでは様々な職業の人々が遠景の富士を感嘆する姿が描かれている。しかし、なんといつてもこのお寺の特徴は、松雲禪師しょううんが一人で彫り上げた等身大の羅漢像五百体である。それらは、

本堂に向かって右、東羅漢堂、左、西羅漢堂に安置されていた。江戸名所図会では、これら羅漢様を、八頁もさいて描いている。京都の若い仏師、松雲が仕事に悩み、酒色におぼれていたところ、師の鉄眼和尚に出会った。以後、弟子となつて精進し、五百羅漢を彫ることを悲願となし、江戸に出た。元禄四年（一六九二）から十余年の歳月を費やし、ようやく完成したのが五百羅漢像である。阿羅漢。修行者の到達し得る最高位にして、最初の仏典編集に集まった、お釈迦様直属の弟子達。全部、名前が分かつており、阿若憍陳如尊者から始まる。五百羅漢寺では、それぞれ尊者の方々の悟りを得た境地が書かれている。全国に羅漢寺はあるが、当五百羅漢寺は親切である。江戸最初の羅漢寺としての良さがある。

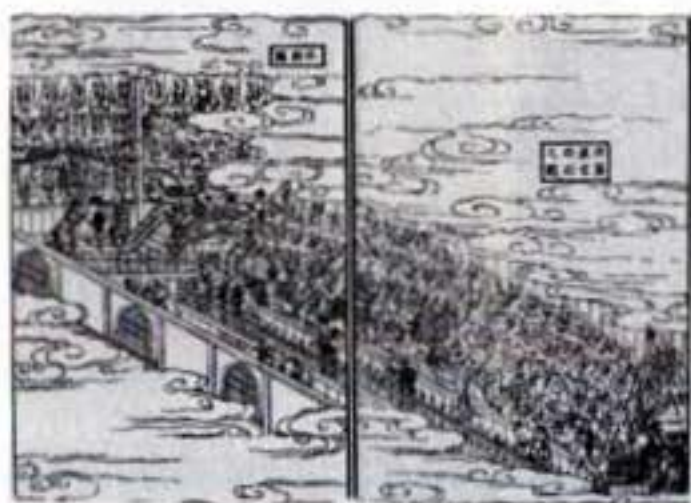
毎年、正月に私は、五百羅漢寺に出向く。そして、羅漢様と会話する。じつと見ていると、表情、ポーズが全て異なる。実にリアル

で迫力がある（東京都指定文化財）。江戸時代の人々は、どなたかの尊者に今は亡き身内を見たといわれる。

落語に「五百羅漢」がある。ある日、八百屋の棒手振り八五郎が見ず知らずの幼い女の子を連れて帰ってくる。迷子で口が利けない。どうやら先だったの大火事で親とはぐれてしまい、驚きのあまり言葉を失ったのではないか。それから夫婦は親を捜す。ある日、「この子は変な子だよ。ヤカンを持って口吞みするよ」とかみさん。「親の躰が悪いのかな。ともかく手がかりがねえんだから探しようがねえ」と八五郎。「それなら、羅漢寺に連れて行って、羅漢さんを見せたらどうだい？ 五百人の羅漢さんのうちには自分の親に似た顔があると思うよ」とかみさん。翌日、早速、子供を五百羅漢寺に連れて行き、羅漢さんを見せた。すると、子供は上の段の一人の羅漢さんをじっと見つめて指をさした。この子の父親はこういう顔か。何かの手がかりになる

と納得して境内を出たところで、ばったり当の住職と出会う。このことを話すと、「今、庫裏の畳替えをしているのだが、その畳屋さんが火事でいなくなった娘がまだ見つからないといつも涙ぐんでいる」と住職。すぐ仕事場に駆けつけると、子供は小さなヤカンを持って口飲みを始めた。「畳やの娘だ！ 仕事場に付いていって親の仕草を覚えてんだ。躰が悪かったわけじゃねえ」。その時、ちょうど庫裏から畳を運び出してきた畳屋は子を見るなり絶叫。はじかれたように立ち上がった子が「ちゃーん！」と声を出して親に飛びついていった。泣きながら子を抱きしめて離さない父親。やがて、二人が手を繋いでヤカンの水を口に含みブーツと吹くと、大きな虹と可愛い虹が立った。下げは、「こちらへ来て良かった。さすが五百羅漢様のおかげだ」と八五郎。すると住職が「なありに、今は親子ヤカン（羅漢）だよ」。

明治四十一年、五百羅漢寺は深川から目黒



◆江戸名所図会 羅漢像と拝観する江戸庶民

に移転した。寺運は衰退し、荒寺となっていたが安藤妙照尼ら尼僧の努力によって法灯が守られ、さらに日高崇敬貫主により再興。現在には浄土系単立の寺となっている。葵の御紋がひととき目立つ寺務所、書院、聖宝殿右側の階段を登ると右手に立派な羅漢堂がある。さらに数段登ると、眼前に本堂。堂々たる釈迦三尊、阿難尊者などの群像も松雲作である。館内にはお釈迦様の言葉が静かに流れる。本堂前、左に將軍腰掛け石がある。それもその筈、伽藍建立で支援したのが八代將軍吉宗である。また、本堂入り口の左壁に、雪崩をうって満州に乱入し、逃げまどう日本の女、子供を戦車で蹂躪した、ソビエト軍の蛮行を描いた、生々しい絵が掛かっている。これを見るたびになんと云ってよいか分からぬ想いに出たれる。思わず、厳かに頭を垂れる。

五百羅漢寺の右隣に海福寺がある。この寺も隠元禪師が一六五八年、深川に開創した黄檗宗の寺で、明治四十三年に現在地に移転し

てきた。江戸名所図会による江戸期の伽藍は見事であった。「鬼平犯科張」の舞台にもなっている。現在の門前石段下左にある宝篋印塔。これは、富岡八幡宮祭礼（水掛祭り、千貫神輿）の際、永代橋が崩れ、大川（隅田川）で溺死した多くの人々の供養塔である（都の文化財）。

行人坂

両寺とも江戸時代は目黒不動尊の敷地であった。川の右側は下目黒町の商家、民家が並ぶ。左に折れた道沿いに、にぎやかな門前町が岩屋弁天蟠竜寺（浄土宗）の先まで続く（山手通）。その先は畑と点在する民家。そして左手に大聖院（目黒不動別当）、

続いて大鳥明神社（山手通りと目黒通りの交差点左角）。大鳥明神社は八〇六年日本武尊東征の遺跡の地に創建された、目黒村の総鎮守府。江戸時代は鬱蒼とした林に囲まれてい



◆広重、北斎のさざめ堂風景画

る。その名残とも云えるアカガシの巨木がある。現在も酉の市で賑わう。神社の角を左に曲がれば坂の右手に広い金比羅様があつた。蟠竜寺は、江戸期とほぼ同じ広さだが門前町を割って入る細長い参道の左右には広がりがある。ここの特色は本堂右後の洞窟に祀られている弁財天である。自然の岩山をくり抜いた洞窟内には灯明が神秘的な暗さを照らしている。現在は人工の岩盤になっているがそれでも暗がりの中、拝みに行くと、江戸時代の雰囲気を感じさせてくれる。

蟠竜寺正面の古道を真っ直ぐ行けば、目黒川太鼓橋にぶつかる（山手通りを右折した現在と同じ道）。畑の中を突っ切っているが道に沿ってところどころに家並みが点在。目黒川は現在のようにコンクリートで固めた直線河川ではなく、蛇行している。河岸の自然風景は江戸の中でも白眉の美しさである。太鼓橋は文字通り、太鼓のような形をした半円形の石積み橋であつた。広重の絵が江戸時代の

光景を現代に伝えている。太鼓橋を渡った右側に椎の古木が今もあるが、その絵に描き込まれている。樹医による手当が施されているがぼつねんと立って絵の方角を示してくれている。この木の左右には中目黒町の商家、民家があり、その右手一帯は、広い明王院（雅叙園）。さらにその右手は川に沿って、広大な細川越中守の下屋敷があつた。

道はくねりながら急な斜面を登って行く。行人坂。この斜面一帯を夕ゆふ日岡ひのおかと云い、江戸時代屈指の観光名所（富士山、紅葉）であつた。

坂を登る。左側は上まで民家、商家の帯が続く。坂は蛇行しつつ、急勾配。右側、明王院（廃寺）に隣接して大円寺。寺は空き地のようになっていて、五百羅漢の石像が囲んでいる。長谷川雪旦が江戸名所図会で描いた頃は、まだこの寺の再興が許

◆現在の椎の木



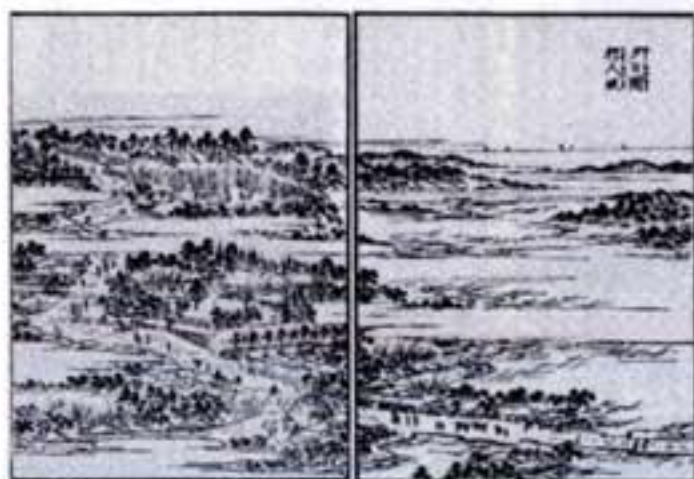
◆広重絵、太鼓橋渡った右手にある木が椎の木。右隅に屋根だけ見えているのが「正月屋」（しるこ餅）



されず、このような情景であつた。明和九年（一七七二）、当寺から発した火災は強風にあおられ、江戸を斜めに切り上げるように浅草まで達し、九百三十余町を焼き尽くす大火災となった。いわゆる、江戸三大火災、「行人坂の大火」である。死者一万五千人。その供養のために石工が五十年の歳月をかけて彫つたのが五百羅漢石像である。大円寺は幕末に島津候の力によって再建され、五百羅漢さんも現在と同じ位置に階段状に配置された。

松林山大円寺（天台宗）は、江戸初期、湯殿山（山形）の修験僧、大海法印が大日如来を捧持して祈願道場を建てたのに始まる。彼はこの坂を切り開き、寺を修験行人派の本山とした。坂道は行人（行者）が多数往来。行人坂地名の由来である。「江戸雀」（一六七七）によれば、坂を下ると右側は茶屋が並び、目黒不動尊に至るまで茶屋続きの町並みをなしていることを伝えている。行人坂は目黒不動参詣道となつていく。

現在の大円寺。門を入ると正面に大黒天（寛永寺、天海僧正が江戸城裏鬼門の守りに伝教大師作と伝えられる大黒天を当寺に祀る。江戸三大黒天）。その左に護摩堂がある。その中に本尊の生身しょうしんの釈迦如来立像が安置されている。国指定重要文化財（昭和三十一年）。頑丈な造りの護摩堂の扉は、正月、四月など特定の日に開かれ、開帳される。この清涼寺式釈迦如来像の優美なこと、その調和のとれた美しさは喻えようもない。柔和なお顔である。釈迦如来像が大円寺に來た経緯は不明だが、度々の災難をくぐり抜けてきたことは事実で、そのこと自体が有り難い存在を象徴している。昭和三十四年、解体修理が行われた。生身（生きているお釈迦様）にふさわしく、胎内には絹、綿で拵えた五臓、髪などが出現。建久四年（一一九三）十月彫刻奉納の事実が判明。その存在は、吾妻鏡に記載されている。当初、鎌倉の寺にあったが地震で倒壊（この時、鎌倉大仏の覆い堂は倒壊）、時は経ち、



◆江戸名所図会 中央下に太鼓橋。
左、くねって上がるは行人坂

北条領の東の果ての守りとして武蔵に来たようだ。北条政子が祈願したという説もあり、髪は政子のものではないかと推理される。行人坂の大火の際には、目黒川に投げ込み、災禍を逃れた。このため金箔は剥がれ落ちたが、別の意味で、その淡く黒光りする、お姿は風格がある。第二次世界大戦でも災禍を免れた。住職の説明では、釈迦像は二つの重要なことを伝えている。一つは、三度の大災害を常に免れてきた希有な存在。もうひとつは祈りという行為の大切さを示しているという。素材はミズキの木造と聞いた。今、いかなる災禍が来ても大丈夫のように、頑丈な鉄筋の覆い堂に匿われている。これを成したのが当時の三井銀行頭取、小山五郎。お堂の扁額は、彼の文字である。

もうひとつ、入って右の傍らに僧、西運の遺徳が描かれている碑がある。鈴ヶ森の刑場で炎と消えた八百屋お七が恋い焦がれた相手、吉三が僧侶になり、後の西運。彼は行人

坂下、明王院で修行し、お七の菩提を弔うために、浅草、浅草寺まで往復十里の道を、鉦を叩き、念仏を唱え、二十七年と五ヶ月、一万日行をやり遂げた。すると、夢枕にお七が現れ、「お陰様で成仏しました」。その道すがら江戸庶民から頂いた浄財で、行人坂を整備し、石の太鼓橋を造ったとある。阿弥陀堂の柱には、「西運（吉三）発願本尊」と刻まれている（阿弥陀堂には阿弥陀三尊が安置されている。明王院が廃寺になったため、お堂と共に大円寺に移行）。境内には、西運（吉三）が一七〇四年に造った太鼓橋の石柱が置かれている。行人坂を登ると左手の角ビルが江戸時代「富士見茶屋」があったところ。人々は、ここで美しい富士を見ながら、飲食を楽しんだ。

【参考文献】

江戸古寺七十 小山和著 N T T 出版、目黒区史跡散歩 山本和男著 学生社



◆鉦を叩き、浅草まで念仏を唱える、僧西運



◆太鼓橋に使用された石材



浄土誌上句会

●黒

〈特選〉
村祭り黒子の目立つ木偶芝居

村祭りとあるから人形浄瑠璃だろう。黒子はその手足を受け持つ。主遣いの陰で動くのだから、目立つては困るのだが、そこは村人の寄せ集めである。主役も何もない。むしろうまい所を見せたいのだろう。

〈佳作〉
御神木の幹黒々と鵬高音

河合富美枝

黒子とは水遣る役目菊供養

中島富士子

黒星の多き力士に秋の風

山口 信子

●情

〈特選〉
釣り情報聞いて乗りたる釣り筏

筏というと真珠筏や牡蠣筏などが一般的だったが、釣り好きが増えて、彼等専用の筏が目立つようになった。今も釣り道具を提げた

浜口 佳春

石原 新

のがやって来て、どの筏のどの辺がよからう
など聞いているのである。

〔佳作〕情のある男が好きでとろろ汁

今田 祐一

父母の情薄くしてふかし諸

増田 信子

愛情の極太毛糸編み続く

井村 善也

●自由題

〔特選〕座布団のきれいに積まれ文化の日

円寺佳世乃

文化の日の行事が行われる会場である。座
布団がきれいに積まれているのは、会がこれ
からなのか、終わって整頓された後なのか。
一体どういう行事だったのだろうかなど、いろ
いろの疑問を起こさせてくれる。

〔佳作〕御来光々えぎる冬の山の霧

金谷 友江

沈黙は返事のつもり秋団扇

寺下 忠至

釣り終えて見上げる空や鰯雲

東 保



編集部選

黒

踳踳の那智黒石や年用意
亡き母の清き黒髪偲ぶ我れ
黒ビール饒舌となる夜長かな
日毎荒れる海黒々と冬に入る
鍵穴の黒々として冬近し
黒山のからくり山車や天高し
段段に折れて案山子の黒き影

金谷 友江
飯島 英徳
佐藤 雅子
工藤 浄真
円寺佳世乃
井村 善也
今田 祐一

情

情厚き言葉刈田の若き若きより
夜の長し人情ばなしドラマめく
情念の糸断ち切れずちちろ虫
情念のカンナ燃えつく無縁墓
秋風情父母出演の学校祭
鶏頭の情の深さに曲がりけり
情死とはかういふものか紅葉山
いくたびも団栗を踏む感情論
コスモスや鉄路の情趣安定す

中島富士子
金谷 友江
河合富美枝
佐藤 雅子
工藤 浄真
中島 敏行
十条 苑を
袴田 阿形
岩永 優子

自由題

母の忌の雲冷やかに暮れにけり
真向いに飯豊連峰刈田晴れ
朝寒や勤行太鼓のリズムなす
まちかどに老舗のおでん笑顔満つ
柿膾食って湖面の近くなる
街道の祭りが果てて菊日和
草の実をつけて悲しくなりけり
天高く雲は草書となりけり
きらきらとそれは渋柿かも知れぬ
目黒 裕
河合富美枝
佐藤 雅子
中島富士子
工藤 浄真
山本 勝之
佐藤 登紀
内藤 隼人
井口 吾郎

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

(季語ではありません)

里子自由題

締切・二〇〇七年十二月二十日
発表・『浄土』二〇〇八年四月号
選者・増田河郎子(『南風』主宰)
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。
宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんはネッ

46 かい目

かまち♡ふしろう



編集後記

木枯らしに人も会社も震撼す

岱潤

今年ほど今まで信頼していたものが、次々と信頼出来なくなった年も珍しいのではないだろうか。大臣が失態続きのあとと絆創膏顔で出てきたり、首相が所信表明演説の翌日に辞意を表明し、さつさとやめてしまうなどということは、小説にすらなるものではないだろう。食品業界はもつとひどい、北海道を代表するお菓子に始まり、生肉の加工業者のたらしめさ、秋田の比内鳥と銘打つ加工業者の嘘、そして信頼が看板のはずの伊勢の老舗「赤福」の居直り、和食のブランド「船場吉兆」のずるさ、その他建設業界では

清水建設、デパートでは伊勢丹などなどあげていけばきりが無い、全ての業界のトップであり、信頼が看板であったはずのところが、組織ぐるみで悪質に儲けていた事実が、内部告発などで次々と明らかになってしまった。

日本人はここまで悪質で汚く儲けることだけを考える国民になってしまったのだろうか。相変わらず振り込め詐欺の犯罪が多発し、詐欺師をアイドルが演じてテレビドラマになる時代、詐欺行為にあらがれさえ持つ若者が増えているという。正直者は馬鹿をみる世の中かも知れ

ない。しかし正直者であり続けることが、唯一世の中を正しくする道なのではないだろうか。
(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
拙博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

浄土

七十三巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十九年十一月二十日

発行 平成十九年十二月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

連載

教えと法話

去^こ 此^し 不^ふ 遠^{おん}

ここを去ること遠からず
観無量寿經

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

過去と現在
は隣り合わせ。
過去から学び、
役立てよう。

境内に木道を造ったとき、地面からたくさん貝殻が出てきました。ハイガイ、ハマグリ、アサリなど。ある時、球形の土の塊が出土しました。直径が十センチくらいです。丁寧に井戸で水洗いしましたら、大きな巻貝です。重さ三四・四グラムのアカニシでした。

鳥羽水族館から参考に取り寄せたアカニシが

六・九グラム。タニシの仲間で、口のところが赤いので、この呼び名が付いたそうです。

黒潮洗う鳥羽のあたりのアカニシより東京湾のアカニシが約五倍の大きさです。縄文時代、東京湾は貝を採取する楽天地だったのでしょう。現在の海水の汚れが分かります。

法然上人鑽仰会の



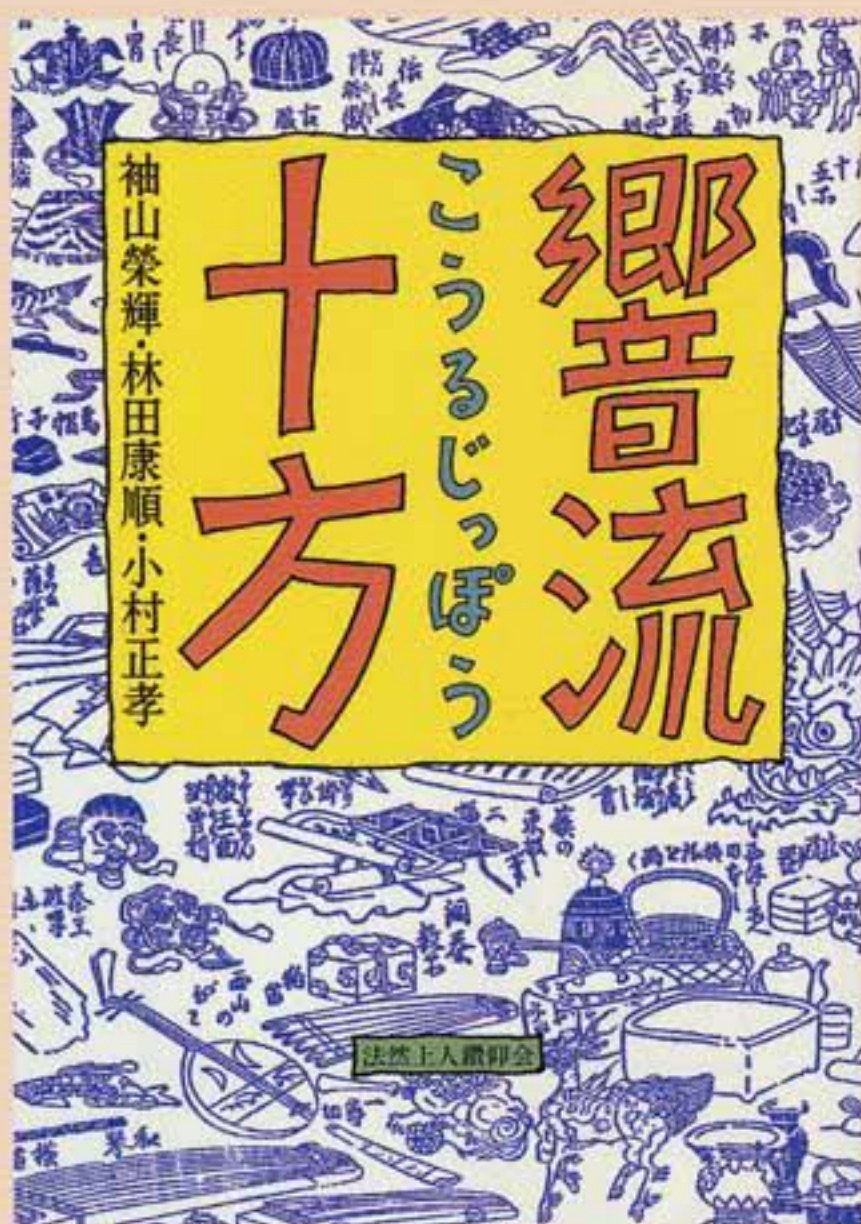
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方ころるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より